へ13
2378
314

特
遠
2378
31

佐野渡怨懸橋 上之巻

緑亭仙橋作

五雲亭貞秀画

天保十年己亥春新梓

全本八冊合巻三冊

鶴屋喜右衛門販

鶏鵡よく言ども。飛鳥をよくるれざ。猩々よく語ども。禽獣たり。鶏鵡飛鳥をよくるれざとく人ども。奸夫婬婦を告知らして。主人の仇と報ひてとあり。猩々禽獣るりとく人ども。大象のふ勇士を誘引。毒蛇を射させ小説あり。見みる唐山の書ふ載り。

人ると人として恩義をもるぞ。鳥獣ゆも芳りるん。そのあやまちを尋れば色ふ迷ひ利ふ惑ふ情慾よりぞ發るる。誠草とそるれりと。狂言綺語をかたつるねて。婦幼の覧ふ呈すること。亦人の口まねしゆる。鶏鵡作者の癖るりと。笑ま種の猩々男ど。なは醉中ふ題まることあり。

天保十己亥年猛春發行

緑亭

近江國犬上郡
河内の豪の遊君
八津橋

八津橋が情客
浪人浮菜辰弥が亡魂

飴賣鸚鵡屋吉兵衛
人異名して九官とよ

女児山崔

九官ぶ児崔太郎

江刀多賀大領氏俊の家臣路鳥沼勇太

周防國大内家の浪人佐野次郎左エ門一道

よみくだし
ころの永ろく
ねんぢうのころとよ
きつふのくに大ちけのらう
あんよ佐の佐々木たろう
うぢみちといふものありける
大内らしころそのきんろ
きうせんきおうかごあやく
きんにおよんでめづらう
らへのとらうごろうおさんハ
うちおぶしあくもへむりくぶ
なりしところこの佐々木たろう
もしこうふ千文ハて
かんぞくとたちのうちそれより
にくのうえおもむきて武げいを
まもぎおうせずどもけんぎゃう
やさらうそのかうそのときあうを
きうめしうべそのなたえやくも
あんきんにきこえけりまつるに
このふうたとへあさきるれとよ
ふかとうしるひさぐらちあんの
あふあひしがせんねんあるさとの
ぎやくらうたえしらうえるれ
だるれよりそあふらもくるの
まきざれがるふとぞふくうひ
めぐりあひこのうともふの人をおで
さめとそまよくの大まようめう
よりめしかくえんとのさまゆも
まさがおぎひさまそうふむしやまる

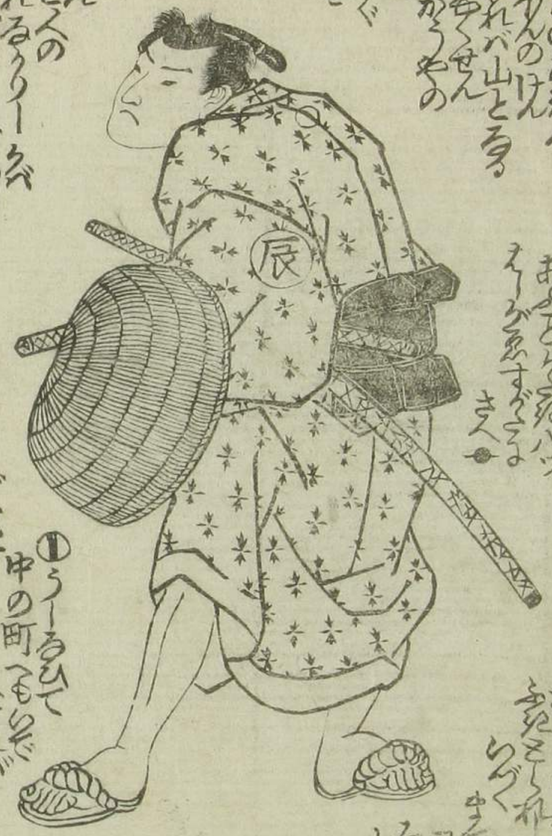
▲おろくく人をおどして
今をとりけるこよひ
えうぎまえそんドて
すでよあやゝうりけるを
めとよりきやうち
ふうきさんのそのかれば
ろくそこの佐々木たろう
ろちよくまりてとりま
とうそのまうあい
せうよあうちうの
らうあんぎて
うめまうまるとらふ
めのまゝりとうるご
むきそてはさだのを
のがれしとぞ
○あさつまぶきの
なれうえせぞそく
そのところあふきの
くふのなかぞこの
ころりかうちの
さとふひとるるそ
のらうさことあり
そのあぎれのひ京の
かでうかしとるうるぞ
されがゆやらのまへ
そのくろまえて
ひさしくそりぬと
の人どもるる

さとしもさいがまるをうしてそんそ引き
うくぢひろ一名のれくとせんとそくさ
大谷へつたあえし今ハるゆのつてれば
がしあれちけのらうゆんあうぬまるをとらよ
あよぶれがしてはやく武ぶらうそこの世のなんを
のがれさせのへとらよ佐々木たろうれあかさいちの
けのらうゆん名りとさらへてらちのあがくしく二十番らうの
ありつろうとあもひしらいきうんまきを三分とうあれど
とれをるうかんぢあるるりとのちかるあるをせがつひ
ゆのらひをそうしるぼべしよくつしをたしるふむべしと
さゝちうらくしてあひゞまうちけりのちふたけべうの
くせのめのへたがの大り手うのけらのなてさだぬま
ぶぞうちさとらふのめるうがさとぶくめのくらをつまり▲

ご佐らしてちうどころハあやこの
くまぞさきたりけるそのところ
あやこのくるゆハさて木の一チだく
たがの大めろう氏とよしとなる人
らち多んはちが佐らしてゆうぶん
とみやこよあつてぞかくて佐々
たまうハ為くくぐもんのむすめあつて
よるべくたがそようぶんの
みやしろへさんけいまうり
けるあるよひとりのくせのめの
うしろよりつけきたりてうろを
ぬらてきりうちをさゝたる
ちのさとの
みやのあひまうぶ山あり
そこの山あり
ありよくそのさと
ろんどらのゆへまよ
あるとみろかの
らうさとのるみどり
ろべしされがこの
くまゝの中あんは
やうえしとさてえてくハ
よてあうせんせい
ゆくぶくにあくその
ころみやこのとしの
みくふのたきの川うちの
さとのへはゆくとそ
こぶく一つのぜんとそ
ひとさへけりあるよ
あるあんやうしハッさしが
ひさうとるてこの女うくのたる
びどんるれどもぞくしやの一人として
そのろうのあふせふのさうあり
みまうしなるるる
あまさの人ゆうへんしそのち
つきとそのまへもしけんるんま
死せんかふるべくと
つまうぶうしてつゞやまけり
あるれども下にてぶふハッそしをやる
あらたま入たちまち

つぎへつゞく

つづき　つひにその身をえんるのいぶーふ
うとされぬまぞふのあたつまりさとのあ発人
でふくのまちやこまものかりのけん
りゆうさくふ月をへてみぢんつのれば山とる
ちんりゆうさくふ日どよりよりよせてまくせん
さくいとたてろーうべんちうかうやの
あまをあさろそのきうぬくまりい
ひんのやまひせんぞうつきそやぐ
かぐそうてうぐのふそのせあを
まのぎらうぷんのこさがこそ
あとぎうろぎのぬぎすてく
みるこれくよつてけり
○されぐまうさうにたこうふい
さとぐうひのかひつまうて
いふくえんどとぐくしるひ
あまうさ人身のもふそうろう
るるまやくせん
ありそそのとくの
うんさふうくれるうりーえべ
そーごうやとくさぐあてる
せいせんーどとあひらぐされてりよく
身のたうぎをうーるひやうやく
かすうろるたうぎとかりそまのあちたぐの
やーうろのそとうふりそうやさんをーて
その日とあくるとりどもぐかのやうさーが
ありうげのこめふつをてうまくーえ
くるうるふうぶんをきくこやうさて
つとあをうるれざりふーいふく
えこのうぐうまそ①



①うーるひて
中の町へもいそ
ぐえよりきこえければ
つこふあせのるうーえそいよく
ひのこくるーめーぐうろふい
うにせえスえ屑ゲでーゆそ
ゐてよくるをうぐにふ
人のふぐそとよくうーせー
えいせめてこひーと
ありぐこうろをうぐ
さまる

えんうまくて
あのるぬえぐふ
ぬえこれうろ
いづく
さぐのまくそうじや

さん

三の巻

二の巻　さーふのとてみぐうう八つえーげ
ぎぐうろををうぐにつあけこれよ
これをえうるふそのやうるとつ西
ぬうーくをうくあひうきー
ているぐゆけるやどよ
ある日つのちうぜうふぎ
おうろてやぎんや

氏

「それうろあうえ
ぐうーじや
まうよく
さーてー
きうやこ

鯨

「りやうう
やうそのの
うつくーさん
ぬふうろうさうる
とぐやどぐりま
ぜうぐそこれ
ちりあれうけこん
おりめも
ぐるうう
それぐあとも
つまうまぜう
きーあそめい
ゆませ反

そぐえのるまぐうを
うちうくふにとぐーゆく
つるやうぎろうふけり
○とーふまうさたぐの大りゆう
氏とーしあるるのんとそ
ゆえるとるぐんとそ
きんぎ西のさむうひ五七
人をりつれたちうく
いぞゆるぐうくうたうまちち
いちどんのうやふにきたうて
いちうのるまぐうを
ちんまくふふにちとーけり
氏とーこれをあやーーて
きんぎ西のりのふこうせて
えるうこいうくーこたけい
せうをえもいられぬふぎい
ぬぐうきうーくうけるえ
氏とーつくーくんこ
まのてようきもんまうい
よこびどんのこと
ひんどるそれいるあのろ
とーのそるあうひい
まんまくれんのりーの
とうりかうるびどんの
今もまりやそもく
とれいるるりの
ぎうぐこるうや

つゞき さてハかのこぜうちハこぶつくりーと
ぶくーせんとそやんどろぎ人をらぎるひきて
かのこのいたわひとりてはやろそーふさもを
たなんとのこあるうべーわきもわくーそれ
るくいとうさやもーっさありとてさそくをろて
いらせけるハあんともはりつれられるこぶろう
どのハは日ごろこくいぶかくえりくひあひ
きあくぶんろりこしふと二下のへぶそろく
くーねくろきくんゆもるびくぶを見ぐく
ひくきくんとそひとりぶたくえ
まをうりぐゆそまーまうす
ともこうそくハあるそ　きあく
なれバあるりくぶ面の
あんくこあをくりとあひ
まあくまをとくさとの
りやーあるれバごあん
あれこそぶれが氏と
ひぶさりれが氏と
大ゆあのくあひ
さていぶぶうろ
あのぶくーひあまー
たるけハせのをこれわ
あくえんとくりげるよ
あうこれるせあてうちハ
せんこそあんこうせるもを
くけあくハんぶうるうあもりこあ
ぶをうくあくーぐきあくろ
しぐきくうれて一よあのぶまぶく

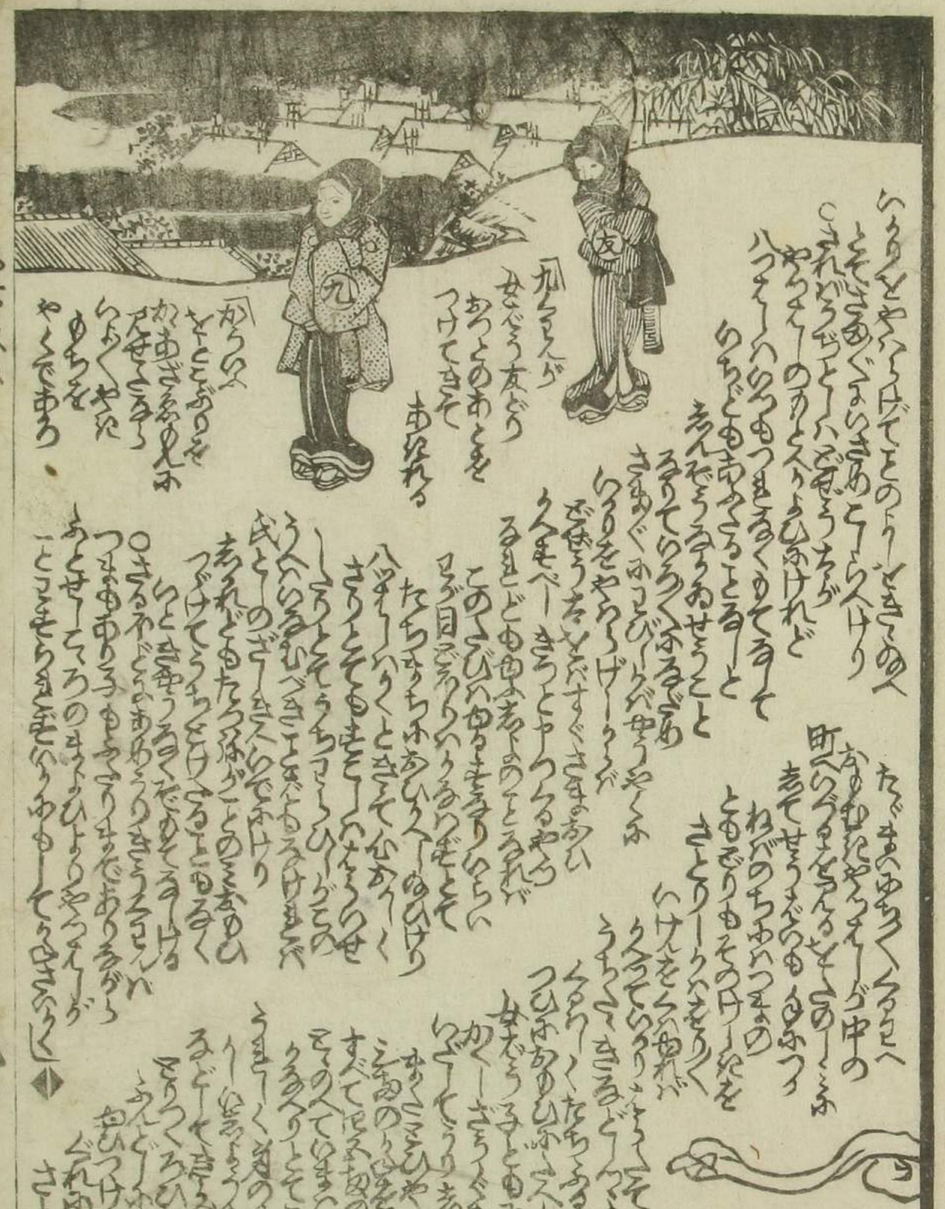
「さだ四まぶせうたハのくろこ
ちぶひて氏とのくきとくあひり
くるとりかひくさるぶあちあて
ふんぶーふうき
たるくあ
ふあを
ひくふ

「まちくへぶぶーてい
ぶうすきるあひふ
まていまんぶろ」

▲かのけハせいとひとよ
くーくーぶこのくのありひて
てんふまぶまーとく

▲ゆんげんだんど
さいあうが
るのたぶるう
まくれとも
まくこ
たくけの
このふれ
ぐふふ
むまんこ
くんく

たぶまハゆちくくるとへ
なりむんやくそーぶ中の
町ぐるをちんるとそこのーくふ
まてせうぶのるるふつ
ねぶのちあつまの
ともぶりもそのけーんを
さとりーくんをりく
いけんをくあれば
くるてくりうきくそく
うちくこきるぶーつのの
くるりくたちふるまひーぶ
つひふあのひふーえくひて
ぶたぶうるとるゆんまく
かくーさちくぶをのち
らぶーてうりまろうる
おくこるひゆて
ふるのくるをけう
すべてにふあのくるを
そのくていまくのぶこ
くるくりとそこてろ
うまーくえのまりく
りーいるくーうをかり
るぶーやたくひやくふ
ぶりつくろひくい
ふえぶーふまくるま
ぶひつけあるゆ
ぶれふりくちの
さとの



「九ろくんが
ぶぶぶう友ぶり
あくとのあくを
つけてきて
あるれる

「かくりく
くとくぶりを
かあぶをるんふ
ぶをくるく
らくゆんた
もちを
やくぶあろ」

ありくくふ
だんく
まんぶ
るるる
以

つゞき

友

雀

東都禾木園宗匠校輯

俳諧芳帙集　全三冊　開板

俳諧叢蘭集　全三冊　追刻

東都禾木園宗匠校輯

俳諧今人附合集　全四冊　秋岡板

俳諧今四歌仙　全一冊　秋岡板

俳諧七人歌句集　素交亭早春板

田舎源氏文箱　小島おようし　上仕立

市子遊戯入　小島さろし

種彦閑書　貞秀画

昔火焚　全三冊

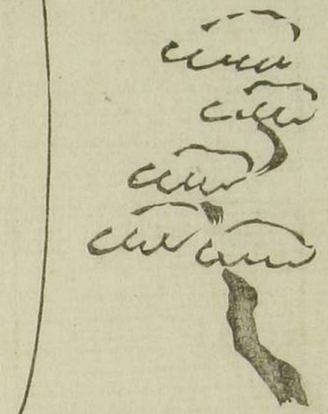
茶番のいろは　全三冊

昔さいち英之　全三冊

昔浦島爺　全三冊

江戸御暦開板所　鶴屋喜右衛門

五雲亭貞秀画
文春新板
鶴喜板
中



字良美濃一の計橋 中之巻

亥の春新刊

仙橋作

貞秀画

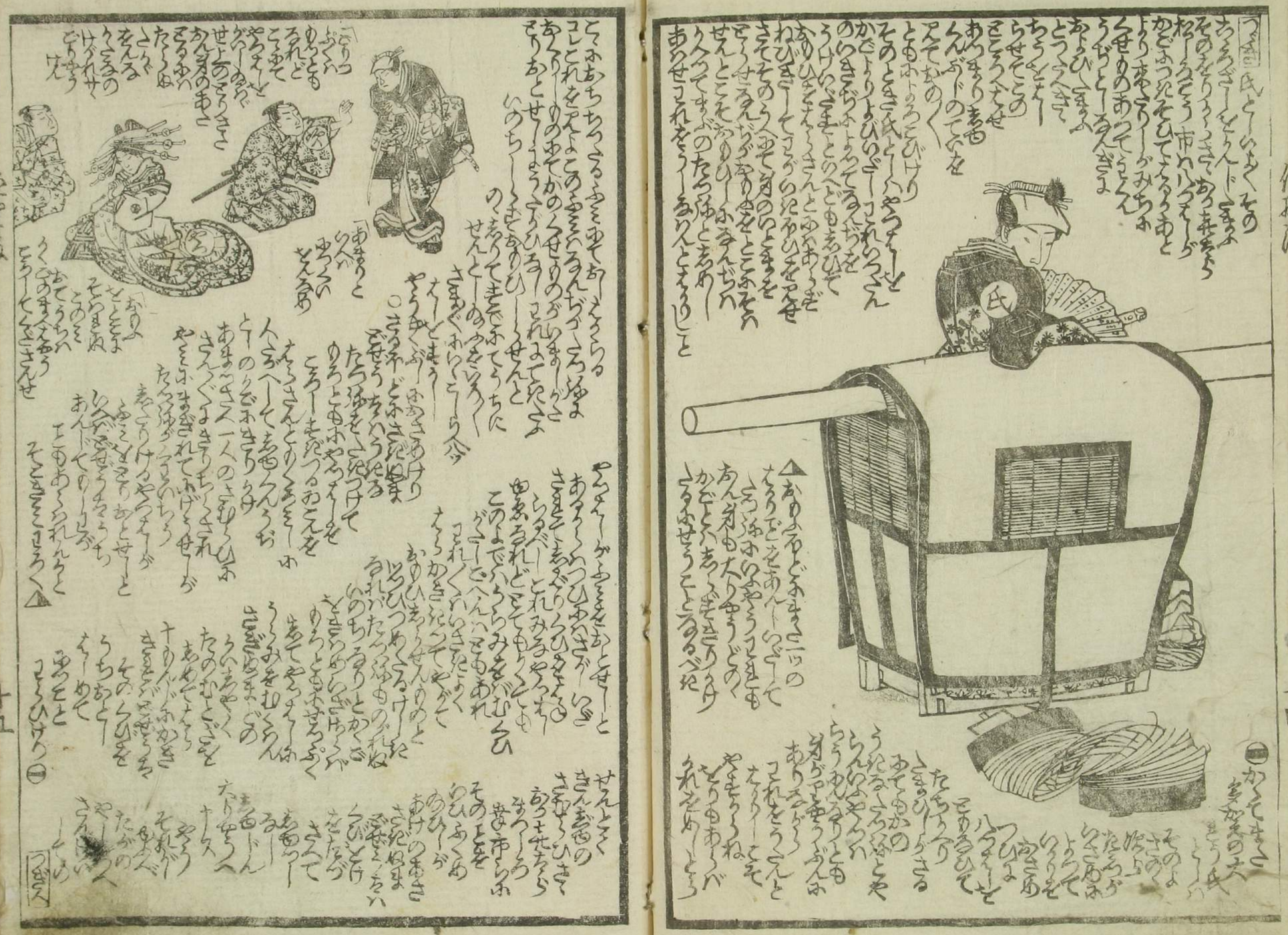
通油町
仙雀堂梓

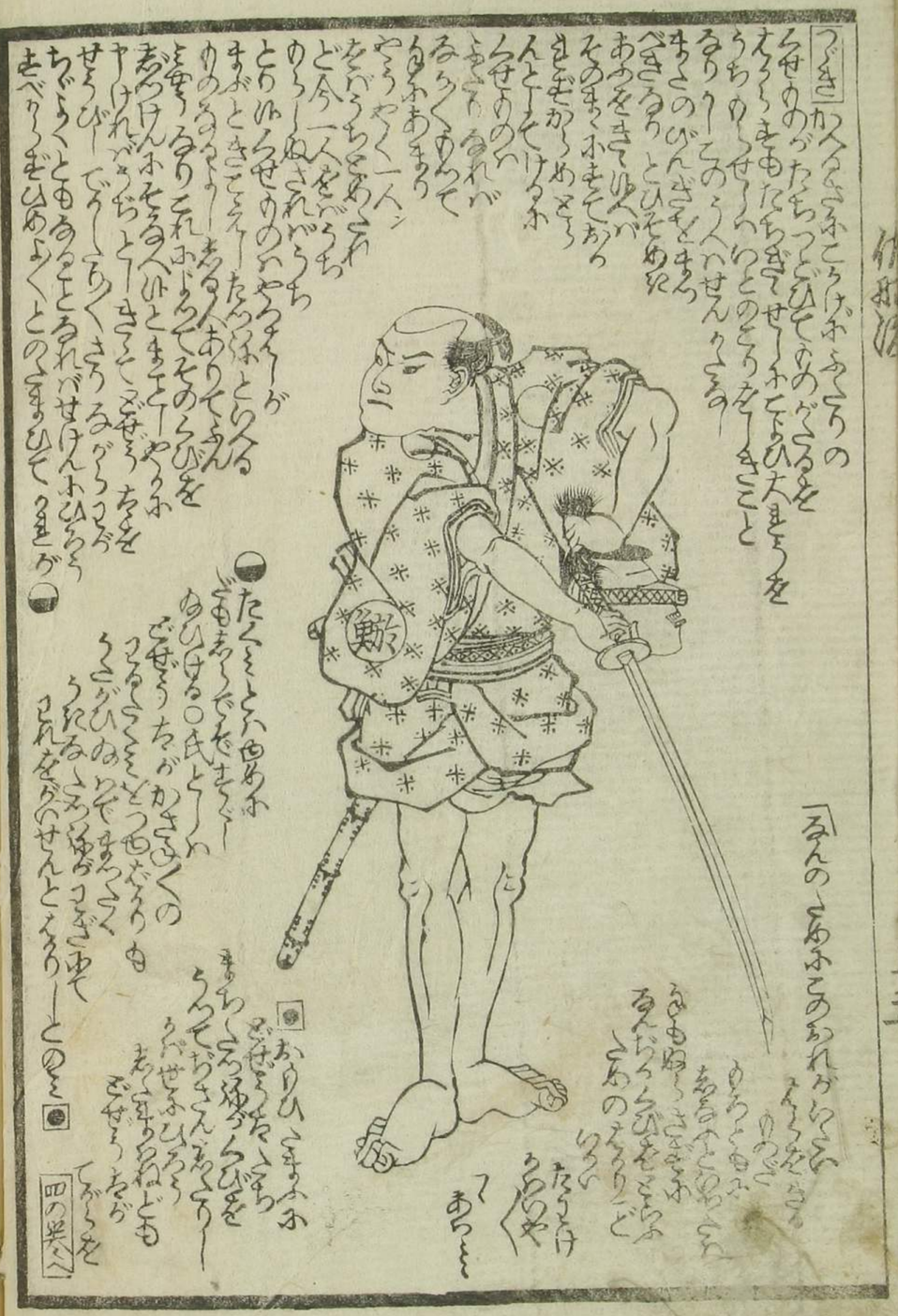
九

山
崔

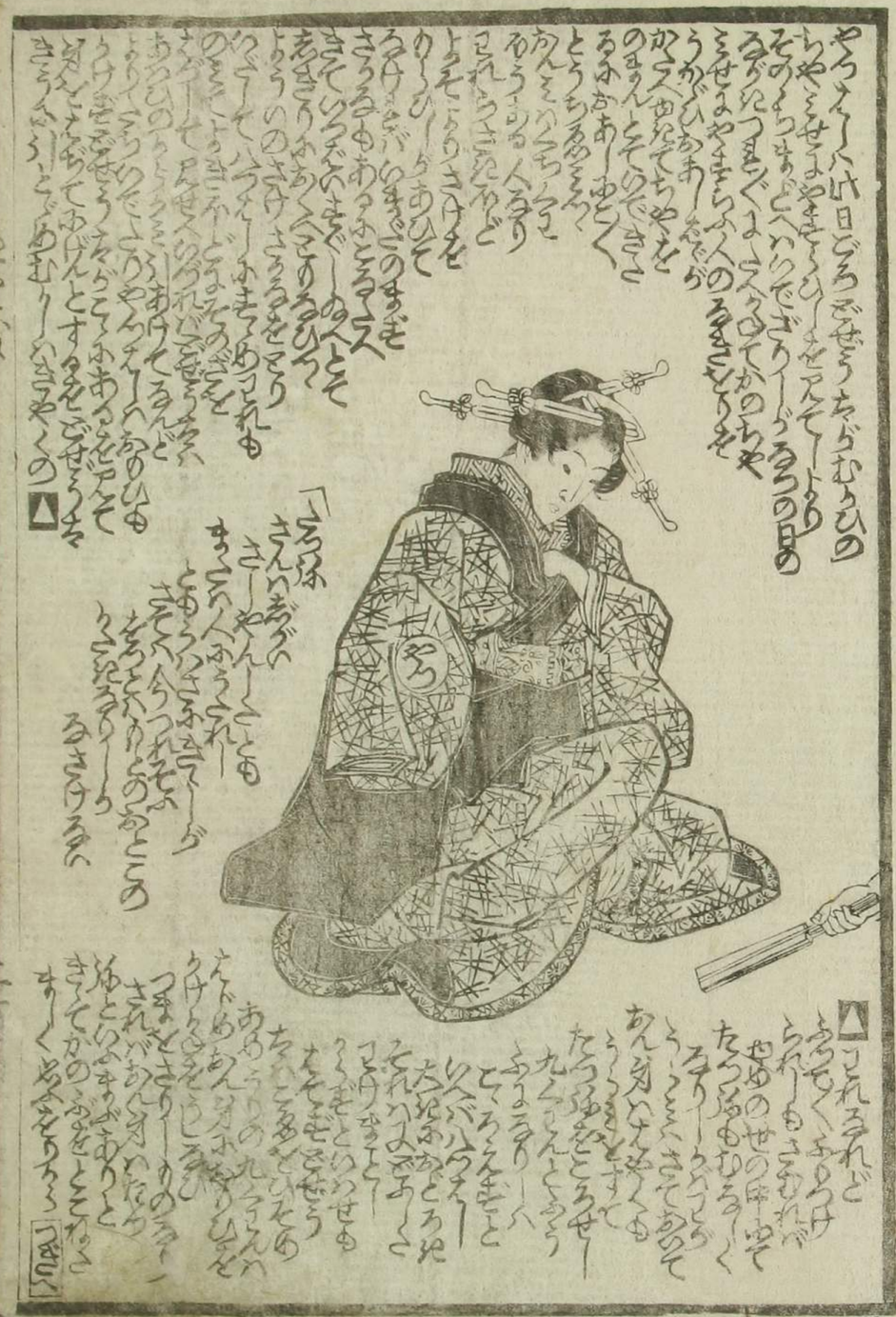
辰

馬


氏



「けふはそこへ
あらはれが
そとけ
たやく
ごろをのり
くえそこの
ぶやうたふ
ゆをまろせ
▲
▲九ごろんを
うろとなれ
たろふへも
みさをへ
ごろの
せぶふあまん
あやきもが
つぶきう
あきれも
あれさへたらが
たらいの



「ごろふ
さんいきづへ
さーやんーこと
まこのんふうれ
とまろうふさてーが
さてへうつれそふ
ごろとりのあとこの
ろこをろーへあのひも
ろけきをもうきてふあるをとそ
ゆんとなぢてゆびんとするをごせうを
きうくいうとびめむりーいきやくの
▲
▲ごれろれど
ろそくちろけ
らりーもさるれば
ぬめのせの中ゆそ
たつふもむろーく
ろりーろうとろ
うこさてあそ
あん月ひなやくも
うこうとすて
たつふをところせー
九くごんとろう
ふようろりーへ
とろうをもと
ひくぶふうえ
たをふあところを
れりんびあーさ
つけまてて
くぎをといわせも
たそをもそぜう
たりこあとひその
あろうりの九ごんへ
ひけくをしろ
つまをさりーりのきー
されがあん月いたら
ゆとりふまりぶあり
きてかのふをとこれさ
まりくやをろろ
つぎへ

貞秀画
仙橋作

かたきうちあふむらさとり
支春新板
下

佐聖波怨敵

義経橋　下之巻

仙橋作

貞秀画

文政乙春發行

通油町

鶴喜板

つぎは　ゑんとうろせーこそあさまーけれ
それとうーてぞきうちはうきるたろ湯ぶ
かさんをそうろぶたそのごさうぶんよとうせて
とうくあふーだんかさへきさうてやうそーと
よびいざきをこんとうろやとあーてあのび
あふとたびくよあうひけうされともきう
うそんいまいあちあめをうやふいぶるゆあ
このとあくぶうーぶある月たやくらくふ
かくるふやうそんーはうちふんそぶかいうくへ
ゆたうーとふどもらよたぶゆればかく
さまうむうひのちやうせんちやとのまんとそ
ゆたうまひーとこふいところうとまけれい
きぶさるまーやいでーちやうきをを
ぶるふはつまーはうあもたうをぞ
りーやとかりひせどうりまうり
ぶくのくこんうれいひまう
ふをたてまうーてまの
まーへはうまーがあひ
どうけてありまふと
ざとうてゆたあし
ぶのひうりてひまう
ぶをけひうくあとふ
かどうたはうまぶまう
ちもあたあがれがまうくうんい
いううのこあくうくふぶうりめえ
つけこうぶみとうぶいれば
あありーぶはあどうたるぶうら
まーふまあてかとことあんるを

ゆぶうさんとそまうくうこんぶあーわ
あぶをうくそのひまうふぶせうたるう
ルうまうんぶうたりーうまりやふいよ
のどとうりひーぶうつひよ
ああとうせーこそひまうえうれ
さればさぶぎゆまうこせうまうん
えうくふまーーてまうーうくうん
とああとうろーまそ
ハッまーふいひ
けるやうまうきう
うくうんいあんゆ
のたあわい
まうふぶ
かうたるり
といくとも
さたやも
ふまでふ
ふまとう
ちくうん
大うやう
とのへのまで
りあまぶ
かくまうちるんどく
いうんふいうくうて男の
あうまとるうまとあるべーたぐるんー
ぜーとひうろうーてのぶかくりあうまん
とそるふうのあつぶのとうろくうるく
こまうまああまうよハくまんーハさまもぶ

「こんぐうとくかうを
たうけ口をんすると
ぶこいめをさまう
アレあれをあ

まあうを
つけく
まあくを
まをまあう
ゆらーい
ふうと
きうあと
ううーどやを
く

〔つゞき〕なんのそうれバいまさらになんのを
うちさうとゐせんすべもなくなへきけるをそ
やう〳〵こゝろをとりなおし　おおいそぎ　と
そもかれ九るうさんが子ゞのをつらゞのへごようきうて
ろくり　おかゝとふ　今わどぐぢゝをそ　ごんし
なてりとまでとしやうはのまゝ山がらすまでたすら
ちくがろにかくなるをアへ　よりもなにかくなすむ
ことおそかくことをきむそのとかうおなれ
さなみぐよふくもりの子どもともろふくい
やんそしがみたをすけしてきさうらへゝもん
のへたるそりなをかへこのごとくよいとなるを
つひよなよるのうちもんそなけりかくそくて
うる切さもあるけれバむさどうえれやんそれ
ものりのめのあのとそつるよそのう人に
きぞらはまぐてふさうるゐもたくざるれ
さけきうるぶとそりちらしおわし　まで
どおすふ山に云ふの　してやうをんしとあそび
ふこいむるふらふやらそんしいふく〳〵と
おめひし九るうさんが子どもを
なる山がらまでたちをと今
さそらふとるがる子とよえんも
うしとま〳〵　そのとろさき
けるみく　せあつひすこし
のあやまち　きたくるなも
やぬきさせるをあて
こゞくるむりをふうる
その　あやけんるのそこ
たとへんふゆのみ　まで

ぞんあへ政せうゆそちつくふ
さんあくたはよさみいやむしされバ
やうそしいつらこおふたちてあんすとの
おつとゆめおちめよそれをまよふでざうう
ちふたちまそてみへつらしそつと
きうくらえをとしるひてたる孫う
あさとむえひしとおめよと
みなそれ銭行ふくらくきき
まよひよりそとおとまり
のまうしめぐさとせきうえんや
これをもんるのゝてくれごまさ
あさまりしらりしあのきあるり
○さるそどふあめさり
九らうさんがむすめ
山がらへそうて
すぐふ十二才
せんがれまで
あんら

七めふ
みなりしちべめく
とふちもうそれまへて
るれちのよとてのと
あめひびごき夜日とそもなく
いとつもけれそでのあめ〔つぎへ〕

雀

山

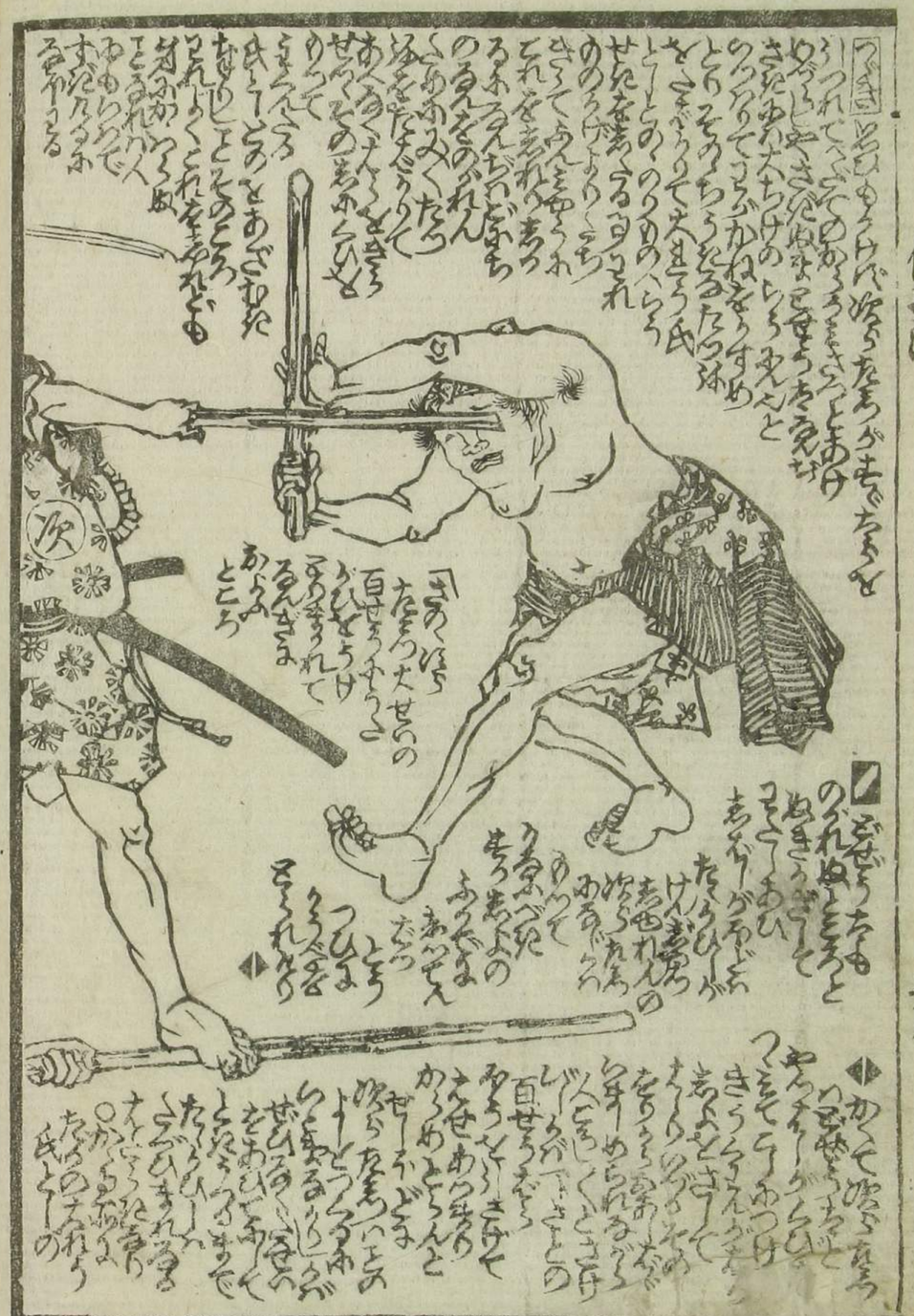
次

雀

次

次
芦

つぎ



山
推
サヒ

天保十年己亥初春新彫

偐紫田舎源氏

柳亭種彦作
歌川國貞画

南華廿八編より三十三編を開板和歌入り美艶仙女香

楠一代記 五冊 歌川國芳画 烏有山人作

百人一首稚講釋 山東京山作 八冊 歌川國虎画

清盛一代記 五冊 烏有山人作 歌川國芳画

佐野渡怨敵懸橋 緑亭仙橋作 全六冊 五雲亭貞秀画

櫻風呂花半開 白雲洞主人作 全四冊 五雲亭貞秀画

藻塩艸須磨書替 松下樓麓谷作 全四冊 五雲亭貞秀画

無筆節用似字盡 曲亭馬琴作

視藥霞引札 各再板 歌川國芳画

美艶仙女香 四十八銅
黒油美玄香 南傳馬町三丁目西側 坂本氏製

書物錦繪扇地紙問屋 江戸通油町 鶴屋喜右衛門